

2024年度 第4回森と水の源流館 授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2024年11月10日(日) 10時~12時30分
- ◇開催方法 ZOOMによるオンラインセミナー
- ◇参加者 米本(雲雀ヶ丘学園小学部)、吉田(県立磯城野高校)、早崎(有功東小)、
山森(京都教育大学)、中谷(和歌山大附属小)、新宮(奈良女子高校)、
加藤(川上村水源地課)、尾上・古山・上西・木村(森と水の源流館)
大西・中澤(奈良教育大学) 13名

◇内容

1. 「農業クラブ プロジェクトの指導からESDへ」 県立磯城野高校：吉田先生

(1) 農業クラブの位置づけ

農業クラブ本部役員会のもとに専門部会プロジェクト研究が位置づいており、教科「農業」の中にも位置付けられている。(プロジェクト研究が探究学習になっており、教科の学習内容を深化する役割もある) 家庭系も加わり活動している。

(2) 農業クラブの活動と地域との連携

「地域の力が生徒の力を伸ばす」をキーワードに、高校生が地域に出ていく機会を増やし、農業クラブの3大目標である「科学性」「社会性」「指導性」を身につける場を増やす。

近畿SSH環境フォーラムミミズ同定実習、SDGs QUEST みらい甲子園関西大会

東大寺のナラノヤエザクラ穂木採取、NHK みらいスイッチ番組、ワキ製菓、奈良植物研究会

・連携のきっかけ：生徒の発表を見ていただき、連携が広がっている

(3) 活動の具体

活動テーマは生徒自身で気になったものを自由に設定している。

EX 「校内の生き物調べと野生生物目録の作成」「田んぼの水族館」「ナラノヤエザクラの挿し木繁殖」

・探究活動を行う上で、背景知識を習得するため、専門での学びが社会につながっていく。

・基礎学力の向上や資格取得にもつながり、希望進路の実現可能性も高まっている。

過去5年間の磯城野からのFFJ検定特級合格者5名はすべてFlowersの生徒。

・2021年はコロナで活動が縮小

2022年 バタフライガーデンを設置

ミミズふふふ〜んど(ミミズ糞土培養土)

生き物調べサポーター活動など

(4) 農業クラブ活動の問題点

仕事には「しなくていい仕事」、「した方がいい仕事」「しなければならぬ仕事」があるが、自分が異動したら活動を継続できないという理由で。管理職からは「しなくていい仕事」とされている。

農業クラブの活動の持続が大きな課題

◎持続可能な取組にするためにFlowers支援チームSeedsを設立

卒業後も活動を希望する卒業生、特に教員志望の教え子

○Flowers支援チームSeedsの活動

プロジェクト研究の支援：Seeds & Flowersとしてみどり戦略学生チャレンジの実施

「廃棄物酒粕を用いたスクミリンゴカイ(ジャンボタニシ)のイネへの被害抑制」

Seeds & Flowers は様々な立場の者が集まる中でのディスカッションの場となっており、多面的に捉える力、批判的な見る力、総合的に考える力、予測する力の育成や、新発見することを通じて、自己肯定感の獲得にも好影響がある。「総合知」

楽しいから続けられる、挑戦できる。仲間との交流・地域の人との交流・大会に参加しての交流

・バタフライガーデンは、地域の高齢者の活動の場になっており、高齢者の健康増進にもつながっている。

・第44回緑の都市賞市民協働部門で「奨励賞」を受賞

【意見交流】

・テーマ設定について。新しいテーマは、生徒の会話の中から生まれることが多い。一方、引き継ぐことが難しく止まってしまっているテーマもある（微振動による発芽促進効果）。

・地域と連携した活動を継続する決め手

「地域に開かれた教員」と「地域に開かれた教育課程」が必要

・持続するためには同僚の理解が欠かせないが

経験したことのある教員ならわかってくれるが、難しい。Seeds のメンバーから教員になる人材が生まれてくることが理想。

・バタフライガーデンはどうやって広げることができたのか

「ちょうちょがくるよ」と地域の推進会議で発信し、幼稚園の人から人へと広がった

2. 「つながる紀の川」4年生総合的な学習：有功東小学校・早崎先生

ねらい：吉野川・紀の川と暮らす人々の暮らしを知り、これからのかかわり方を考える。

学級全体で取り組む総合学習と児童の個々の関心で取り組むマイカリキュラムの2本立て

・子どもの思いや願いを大切にしたい実践

【導入】

身近な千手川の調査から紀の川に向かう

紀の川大堰の見学：紀の川の概要を教わる、干潟での生き物観察会

【学習課題の作成・学習活動】「紀の川についてもっと調べてみたいことは？」

学習テーマ：紀の川の自然や、川と人のかかわりについて調べよう

○協働学習とマイテーマ学習

①どのようにして紀の川の水が水道水になるのだろう

和歌山市環境部と連携し、浄水実験（水道水がつくられていくしくみ）

②紀の川上流の見学 川上村蜻蛉の滝、源流館見学

水の始まりを知る 大滝ダムの見学

③田畑にどのように利用されているのだろう

小田井用水、県立博物館

④水質の比較 川上村の水と千手川の水

⑤川魚の飼育（千手川で魚釣り）

⑥千手川のゴミ調べ

⑦大滝ダムの役割 大滝ダムができる前・ダム建設反対運動 村長にインタビュー

⑧産業：柿の葉寿司について大滝茶屋にインタビュー

⑨川上村の神社・村の神様の話

○中流域

天然アユを守る人々の仕事

【意見交流】

- ・川上村の水に関わる「文化」を学んでいる。中流域の水に関わる「文化」と比較し、共通点と相違点（独自の文化）をぜひ見出す学習をしてほしい。それは文化を学ぶマスターキーの獲得になる。
- ・協働学習とマイテーマ学習の往還がよくできている
- ・大滝ダムの役割は治水・利水だけではない。水源地の村づくりに表現されている通り、村人のアイデンティティを形成するものとなっている
- ・大滝ダムのカッコよさ（村人の思い）：暮らしを守ってくれている、水に対する思いの象徴のような存在、大滝ダムを通じたいろいろな人との出会いや広がりがある
- ・水とのかかわりを学ぶマスターキー、水とのかかわる生き方になっていく
- ・当初、関心の薄い子への対応
紀の川大堰でもらった「紀の川の暮らし」をみんなで読んだ、周りの子どもからの刺激がある
千手川の自然や生き物、川上村への見学が体験的な学びとなり、関心を高めている
追究できそうな複数のテーマを提示し、選択させる
ほかの児童のテーマを紹介する
テーマは途中で変更してもよいと柔軟な姿勢で対応する
- ・子どもの変容としては、「課題を設定する力（不思議を見つける力）」「活動の見通しをもつ力」が育成されている。